

ACTIV 「妖婆の森」

大国アルテラへのルートは二つある。一つは例の使者が乗ってきたレズマという獣を使っ
ての陸路。しかし、これには途中どうしても通り抜けなければならない森にいる妖婆が障
害となる。もう一つは船で河を下り、内海からアルテラに入る海路。しかし、これには
海に棲む海竜が邪魔をする。

できることであれば、これらの妖婆や海竜には邪魔されたくないというのと、あまり
能力を使いたくない…この国ってリュシーのような能力者がいっぱいいるらしいので、
このどちらでもない方法を考えることにした。

「妖婆ってようするに歳とった能力者なんでしょ？」

「それだけじゃないさ。」

無理やり連れてきたので怒っているのか、ユージはぶっきらぼうにそう答える。

「どういうことよ。」

「妖婆は妙な魔法を使うんだ。」

「魔法？」

「リュシーがドラゴンになっちゃっただろ、ああいう奴さ。」

ふーん、魔法ねえ…。どうも、あたしが知っている能力とは根本的に質が違
うような気がする。

その妖婆が住んでいるという森をゴンドラから見下ろす。そう、あたし達は考
えた末に、陸路でも海路でもなく、空からアルテラに入るルートに行くことにした訳。
と言っても、まさかあたしの能力だけで飛んでいくのは避けたかったんで、この
国には存在しない熱気球をフェアリーに作らせることになった。ユージの機嫌が
悪いのは嫌いな空を飛んでいるせいかもしれない。

まあ、材料自体はそう手に入りにくい物じゃないんだけど、なんせ見たことも
ない物を作ってもろおうっていうんだから、最初は何ヶ月かかることかと思っ
ていたんだけど、やり始めたらたった一週間で出来上がってしまった。ま
ったく、アルテの人達の働きぶりには驚いてしまった。フェアリーはど
こでそういう知識を入手するのか分からないんだけど、ちょっと説明しただ
けで熱気球がどういう物かすぐに理解してくれた。でも、他の人達はま
ったく知らない筈なのに、ああだ、こうだと大騒ぎしているうちにちゃん
と出来上がるんだもの。

「ユージ、リンゴ食べる？」

「いらない。」

熱気球で出発する時にフェアリーが持たせてくれたリンゴを手の中で転がす。

「本当は怖いんでしょう？」

「そ…そんなことあるもんか。」

「じゃあさ、そんな怖い顔してロープにしがみついてないで座りなさいよ。」

「しがみついてなんかいないさ。ロープが切れていないか調べていたんだよ。」

「だったら、大丈夫だからいいから座って。」

ユージは本当に恐々という感じでゴンドラの中央に座った。

実はユージを連れていくというのは、あたしがフェアリーの代理を引き受ける
気になった時に一番最初に考えたことだった。どっちにしても一人で行くつもり
はなかったし、誰かを選ぶつも

りだったんだけど、この子のアルテについての知識の豊富さとあたし自身がすごく気に入ったという理由もあって、ユージを連れていけないならアルテラには行かないとフェアリーにごねてみたんだ。

ユージは当然のごとく反対したんだけど、そこはそれ、フェアリーが無理やり従わせた訳。だから、もし空路での旅でなかったにしても機嫌がいい筈はないのよね。でも、いつまでも拗ねていられても困るし、そろそろ機嫌を直してもらわないとね。

「一つ教えてほしいんだけどさ、なんでフェアリーのお父さんはアルテではなくアルテラの王様なのか、アレン卿がアルテを欲しがっているのか、その辺がよく分からないんだよね。」

ユージはちょっと首を傾げて鼻をならす。

「ふん、本当に何も知らないんだな。この惑星ミスメリオンでは4つの大国があるんだ。テリオス、マーコック、デスティン、それにアルテラ。ミスメリオン皇帝は世襲制なんだけど、この4つの大国の大公というのは4年に一度の月食の夜に行なわれる聖妖祭で選ばれるんだ。」

「聖妖祭…？」

「そう、聖妖祭さ。そこで周囲の小国の領主の中から大公となる人物が選ばれる。」

「なるほど、それでフェアリーのお父さんはアルテラ大公に選ばれたって訳ね。」

ユージは喋りだして少しは落ち着いたのか、あたしが皮をむいたリンゴをひったくっていく。まあ、いつまでも不機嫌なよりはいいけどね。

「でも、話しはそれで終わらないのさ。聖妖祭での決定は辞退できないことになっている。本当は大公様はアルテラには行きたくなかったんだけど、決定には逆らえないから仕方なくアルテラに行ったのさ。で、本来なら大公の弟であるアレン卿がアルテのお館を継ぐ筈だった。」

「あら、だってアルテにはフェアリーがいるじゃないの？」

「アレン卿はあまり評判がよくない。フェアリー様はそんなアレン卿の悪い噂を聞いて、アルテラについて行かずアルテに残ったんだ。村人達はみんな喜んでるよ。」

アレン卿か…、なんとなくどんな人物なのか興味が湧いてきた。どうせ会うことになるだろうし今から楽しみだわ。どうも最近では敵に会うとなるとウキウキしてきちゃって、…悪い傾向よね。

あたしはリュシーに貰った地図を広げた。これはアルテラ圏内での地図らしい。中央の大陸がアルテラ、その周りにいくつかの島が点在していて、これがアルテラ圏の小国らしい。その小国の中でもアルテはもっともミスメリオンの極に近いところに位置している。そのわりにあまり寒くはないということは、ミスメリオン自体が地球と比べると太陽に近いということなのか。

普通に地球での常識で考えれば、その惑星の極付近が快適な気候とすると、赤道付近はものすごい高温にということになる。でも、リュシーの話しではそこにも大陸があって人は住んでいると言う。もしかすると、ミスメリオンという惑星そのものにまだ謎があるのかもしれない。そう考えたほうが、ミスメリオンにどうして能力者が多いのか、どうして魔法なんてものが存在するのか考えやすいかもしれない。

「リュース、リュースはさ、何でもできるんだよね？」

「ま、まあね、そういうことになっているみたいだけど…。」

と言っても、あたしはそれこそ魔法使いじゃないから、物理法則に反することまではできない。べつに数学嫌いのあたしが理解して使っている訳ではないけど、いつもあたしが能力を使っ

ている時は、それは必ず物理的には証明できることらしい。

「で、それがどうしたの？」

「この気球って言ったっけ？これを飛ばしているのはリュースの能力？」

「違うわよ。」

「じゃあさ、上のあのでっかい風船が割れたらどうなる？」

「当然、落ちるわね。」

ユージは途端に胸の上で十字を切った。

嫌な予感がしてそーっと上を見ると、無数のカラスが気球を一生懸命に突っついてる。

「この惑星ってカラスが多いのね。」

そんなアホなことを言っている場合じゃない。何かカラスを追い払う手を考えなきゃ……。いや、もう間に合わない！

飛べ！

次の瞬間、あたしはユージを抱きかかえてゴンドラから飛び出していた。

「うわあ、やめろ、やめろ！俺は高所恐怖症なんだってばあ。」

「うるさいわねえ。つべこべ言うところの手を離すわよ。」

「わ…分かったから、早くどこかに降りしてくれよお。」

叫んでいるんだか、泣いているんだか、なんか半分半分な感じ。こんな所で冗談している場合でもないし、とにかくまっすぐ森の中へ降りていく。

さっき地図は頭の中に一応入れておいたし、たぶんここからならアルテラまでそんな離れていない筈。

「いったい何だったのよ。」

「知らないよ。あんなカラスの集団は初めて見た。」

ようやく地面に足が着いてホッとしたのか、ユージの元の口調が少し戻ってきた。

「生命を狙われるって、こういうことだったのかしら…？」

「これで終わりなら、それでも許せる範囲だと思うけどさ。たぶん、これって最初だよ。これからアルテラの領地に入ったら、もっと狙われるよ。」

ぐたーと大地に座り込んだユージの肩をポンと叩く。

「でも、アルテラに行かなきゃ。それがあたし達の使命だから。」

絶対に行ってみせる。アルテラ公に会って、フェアリーの気持ちを伝えなきゃ。じゃなきゃ、何のためにここまで来たのか分からなくなる。たとえ成り行きでアルテラに行くことになったにしても、行くと決めた以上は死んでも引き返すなんて選択肢は選ばないんだから。

「やれやれ、俺はただフェアリーのそばにいらればそれでいいのに…。」

ユージがフェアリーのことを好きなのはここへ来てすぐに分かったわ。逆に言えば、気づいたからこそわざと二人を引き離してみたというのもある。ひょっとしたら、これで二人の本音が聞けるかもしれないって思った。

「さあて、そろそろ行きましょうか。飛んでいく？歩いていく？」

「歩く！もう落っこちるのはたくさんだ。」

ユージは慌てて立ち上がると、足早に歩き始めた。

あたしはちょっとクスクス笑いながらユージの後を追いかける。腕を大きく振りながらズンズ

ン歩いていくその姿は、後ろから見てみると妙におかしい。

歩きながら空を見上げる。木の枝が邪魔をしていて、気球がどうなったのかまったく見えない。ここでは透視ができない分、余計に見えないことが気にかかる。

まあ、見えないものを捜していても仕方がないか。視線を変えてあらためて森の様子を見回してみた。この森にも珍しい小動物がかなりいるみたい。さっきからチョロチョロ目の前を横切ったり、頭の上を飛び越えていたりしているのがいる。ユージが気にしていないところを見ると、この森ではよく見る連中なのかもしれない。

ただ、ちょっと気にかかるのは、愛嬌のある小さい連中に混ざって、時々変な感情が流れてくること。はっきりとは感知できないんだけど、むこうが姿を見せる気がないんだったら、こっちからはしかけるつもりはない。あたし達はアルテラに着けばいいんだから。

ユージが急に立ち止まってあたしの方に振り返った。何かおかしな物を見つけたいらしい。

「どうしたの？」

「おかしいよ。本当ならそろそろ森を抜けてもいい筈なんだ。いくらなんでもあそこからこんなに歩く訳がない。」

そうか、そういうことね。こんな悪戯ができるとしたら、森の妖婆が現れたかな。どうせあたし達の視神経に悪戯して、いかにも森をまっすぐ歩いているように思わされているんだろう。

「ユージ、悪いけどさ、あたしの後ろを歩いてくれる？でさ、たとえあたしに変な方向に歩いていっても黙ってついてきて欲しいの。」

ユージはジーッとあたしの瞳を見て、そして大きく頷いた。

あたしは大きく一つ深呼吸をすると静かに目をつぶった。下手に目に頼るから物事の真実が見えなくなる…というのが、あたしの持論だったりする。だとしたら、これはその実践としてはとっても好都合かもしれない。

目を閉じたままグルッと一周回ってから精神を集中する。アルテラへ向かう正しい道は一つの筈。しかし、どの方向にも真実らしさを感じることができない。逆に言えば、どの方向もあたしに嘘をついているように感じる。

どこにもアルテラがない。だとしたら真実はただ一つだけ。ユージはもうそろそろ森を抜けている筈だと言ったわ。もし、それがその通りだとすれば、答えは簡単。ここが、今あたし達が立っているここがアルテラだわ。

思い切って目を開ける。そこには森はなく、きれいなアルテラの町並みが広がっていた。ユージも一緒に目をパチクリしている。

「上出来、上出来、お姉さん、意外と頑張るね。これじゃ俺の出番はなさそうだ。」

どこからか響いてくる拍手のイメージとメッセージ。でも、この喋り方には覚えがあるわ。

「キュル、あなたね。あなたがこんなことをしたの？」

「やったのは森のおばばさ。俺はリュシーから伝言を頼まれただけ。」

「伝言…？何なの？」

「フェアリーがアレン卿の手の者に騙されて毒を飲まされたらしい。どういう毒なのか分からないので、今のところ手の打ちようがないんだ。フェアリーがいつまでもつかは分からないけど、とにかくアレン卿から解毒剤を貰ってきてくれってさ。」

「なんでそんなことに？」

「さあ、俺も詳しいことは知らんよ。とにかく確かに伝えたからね。」

フェアリーが毒…？あの子がそんな簡単に騙されるとはちょっと思いにくい。

「待ってよ。キュルも手伝ってくれないの？」

「何のために？俺達ジーンはアルテの村人とは仲が悪いんだぜ。伝言だって、リュシーからの頼みじゃなけりゃ引き受けなかったよ。俺は高みの見物をさせてもらうよ。」

「あん…。」

あたしが掴まえようとするより早くキュルの気配が消えてしまう。

「どうしたんだ？」

ユージはまだ目がおかしいのか何度も瞬きをし続けている。

「フェアリーが毒を飲まされて倒れたらしい。何が何でもアレン卿から解毒剤を貰わなくちゃならなくなったわ。」

「どうして…？」

「詳しくは教えてくれなかった。でも、分かっているのは、ここであたし達がモタモタしていたらフェアリーが死んでしまうということよ。」

早く帰らなきゃ…。

大公殿はアルテラの街の中心部にあり、それはアルテラにいる限りどこからでも見えた。ここにアルテラ公とアレン卿がいる。

「ユージ、覚悟はいいわね。」

「うん…。」

実際、敵の真っ只中に飛び込んでいくには、ユージはちょっと可哀相過ぎるかもしれない。本来なら置いていくところだけど、将来のため、本人のため、ユージはきっと一緒に行った方がいい筈。

風が動いた。人々が動く。アルテラの街に活気がみなぎる。ミステリオンの上に朝がやってきた。

A C T I V 「妖婆の森」

S62. 18. OCT <<H23. 30. JAN>>